
奇跡

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡

【Nコード】

N3006D

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

「バーロ……。奇跡っていうのは……。☆やっぱり書きちゃったよ、クリスマス話！新蘭です☆おそらく、うちの作品至上最大級に甘いです。やっぱりクリスマスですしね☆三人称です。……。自分で読み返してて恥ずかしくなってきた；☆甘いものを求めている方のご希望に添えていたらいいなと思います☆では、読んでいただけたら嬉しいです（＊＾ー＾＊）

もうすぐ、工藤新一が“やっかいな事件”を解決して戻ってきてから2度目のクリスマスがやってくる。

戻ってきて、まず最初に幼なじみの蘭のところへ行き、今までのことの謝罪と、

告白を済ませた。

ずっと好きだった、と。

戻ってきた新一に、怒りながら泣き、でも嬉しかった蘭はビックリすると同時に顔が赤くなった。

何よりも望んでいた新一が戻ってきたことだけでも嬉しかったのに、思ってもみなかった告白。

幸せで幸せで、そして恥ずかしくて……。

「私も好きだよ、新一」

赤い顔のまま、新一をまっすぐ見つめて言い切った蘭に今度は新一の方が赤くなって……。

「おかえり、新一」

ニッコリ笑って言った蘭に、自分を抑えることが出来ず、思わず抱き締め

「ただいま」

と蘭の耳元でささやいた。

そんなことがあったのは、夏真っ盛りの1年前の8月。厳しい猛暑の日だった。

そして、約1年と4ヶ月が過ぎ、季節はもう冬になった。

本当の、誰にも文句を言わせない完全な恋人という位置に立った新一は、

クリスマス을大切な日にしたいと気合いが入っていた。

まず、蘭にはクリスマスの予定を空けておくように言った。

「あ、蘭！ クリスマスの予定空けとけよ？」

「え、どうして？」

「ディナー。行こうぜ？」

「！ ……うん！！」

新一がディナーの予約を入れたのは、いつかの米花センタービルの展望レストラン。

理由は言わずもがなである。

続いて、警察の皆さんへ前もって言うておくことも忘れない。

「すいませんが、今度のクリスマスだけはヤボ用があるので、捜査のお手伝いは辞退させていただきませんか？」

「あら、蘭ちゃんとデート？」

「ええ、まあ」

「羨ましいわね。去年は私達が引っ張り出しちゃったからね。いいわよ！ 警部にも言っというてあげる」

「ありがとうございます」

「バッチリ決めておいでV」

「……頑張ります」

苦笑した新一は、その後しばらく佐藤刑事に、どこへ行くかや、何をするかなど質問攻めにあったが。

いつもなら、事件であればたとえ蘭と過ごすことになっていても、捜査へと走り出してしまふ、日本警察の救世主である新一だからこそ、

あえて、事件が起こっても知らせないようにしてもらいたかったのだ。

おそらく、事件と聞いたら居ても立ってもいられないだろうから。

去年は、蘭がクリスマスを一緒に過ごそうとして、計画を立ててくれていたのに、自分のせいでその計画はパアになった。

だから。

だから、今度は新一が計画を立てているのだ。

蘭へのクリスマスプレゼントもきちんと準備をして、いよいよクリスマスがやってきた。

6時に、フォーマルなスーツに身を包み、上から濃紺のコートをはおった新一は、毛利探偵事務所の前にいた。蘭を迎えに来たのだ。

「新一！」

嬉しそうな声で出てきた蘭に、

「よお！」

と返事をして片手を挙げて、そのまま固まった。

白いロングコートに、黒のブーツ。いつも下ろしている髪の毛はアップにされていて、うなじがとてもキレイだ。いつも見る雰囲気と違う互いの姿に赤くなり。

それでも先に口を開いたのは、蘭だった。

「へ、変かな？」

「いや……キレイだなと思って」

「！！　ありがとv」

「行くか」

「うん！」

2人でゆつくりと道を歩く。

街は、クリスマスイルミネーションでカラフルに彩られ、人々は幸せそうな笑みを浮かべている。

しばらく歩き到着したのは、以前も来たことのある米花センタービル。

展望レストランへと行き、

「予約していた工藤です」

と、ウェイターに告げる。

そして案内されたのは、やはり……

「え、ここって前も座ったよね？」

「覚えてたのか？」

「もちろん。高そうなレストランだし、緊張してたし。新一が戻ってこないかってずっとキョロキョロしてたしね」

「申し訳ないです」

顔を見合わせて吹き出す。

「さ、頼もうぜ」

「ねえ、やっぱり今日もお金って……」

蘭は、もちろんあのゴールドカードが出てくると思っていたのだが……

「ん？ ああ、もちろんオレ持ち」

「え！？ あのカードは？」

「持ってきてねえけど？ とにかく今日はオレ持ち！ OK？」

「う、うん……」

蘭は不服そうだったが、とりあえず同意し、コース料理を2人で頼む。

しばらくしたら、飲み物がやってきた。

「じゃあ、メリークリスマス？」

「うん。メリークリスマスv」

チンとグラスが触れ、ディナーはスタートした。

「ねえ、新一。どうしてこの席なの？」

「ああ、ちよつとな……」

「ふーん？ ……あ、コレおいしい！」

「ん。うまいな」

だが新一は、料理よりも別のことで頭がいっぱいだった。
目の前の蘭がやっぱりキレイなのだ。

ベージュのニットのセーターを着て、そのセーターには複雑な模様が編まれている。

濃い緑色のプリーツのスカート。

胸元に光るネックレスが蘭によく似合っていて、いっそうキレイに見せていた。

もちろん、食事をしながらも、蘭に向けられる男共を視線だけで威嚇する。

もっとも、自分に向けられている視線には全く気づいていない。

一方、蘭は蘭で、新一の姿に目を奪われていた。

スーツを上手に着こなす新一は、いつもと違い大人な雰囲気を出していた。

このレストランに入ったときから、周りの視線を感じる。ただでさえ、有名な新一。

それが立派なスーツを着ていれば当然ともいえる。

だが、新一と同じく、蘭自身に向けられる視線は全く意味を分かっていない。

新一には似合わないのだ、と内心落ち込んでいたりもする。

しかし、一切その様子は見せまいと明るく振舞う。

もちろん、新一は気づいており、気づかないふりをしつつ、またつまんねーことで悩んでやがると思っているのだが。

そんなことを考えているうちに、料理も食べ終わり、ふと蘭が呟いた。

「何か奇跡みたいね……」

「あ？ 何がだ？」

「だって新一が事件のことを考えずに一緒にクリスマス過ごせるなんて、奇跡が起きたみたいじゃない？」

「バーロ……。奇跡っていうのはな、起きるんじゃなくて起こすんだよ……」

「？ どういうこと？」

「こっちの話」

だって警察の方々には、今日は呼び出すなどと言ってあるのだから。

「キザねー、新一」

「うっせー」

アイツほどじゃねーよ、と思わず口に出かかったのを何とか止めつつ、

一瞬頭を過ぎった白い影を頭から追い払う。

すると新一がポケットに手を入れ、用意しておいたプレゼントを取り出し、テーブルの上に置いた。

キレイな包装紙に包まれた、小さな手のひらサイズの箱。

「なーに？ コレ」

「蘭、あのさ——」

告げられた言葉と、プレゼントの中身を知り、蘭の顔が今まで以上に赤くなり、
そして、目に涙が浮かぶまであと1分——

蘭の返事を聞き、思わず立ち上がった新一が蘭のほうへ行き抱き締めるとき、
実は聞き耳を立てていた周りの人から温かい拍手が起こった、とか
……。

この日以来、米花センタービル展望レストランで語り継がれる伝説のカップルが1組増えることになる。

だが、それが親子2代だということを知っているのは、当事者の4人だけ。

もちろん、この席が新たなプロポーズの名所になったのは言うまでもない。

(後書き)

【Merry Christmas!】

みなさま、こんにちは。そして、メリークリスマス！ペロコです。
お読みいただきありがとうございます。

☆あまり書くことのない新蘭でいつてみたクリスマス話でした。クリスマスってことだし、キッドでいくか……というのも考えたんですが、話が全く思いつかず；

そして、キザなセリフも浮かばず。

サンデー本誌で暴れまくってるキッドがいるので、なおさらかも？

☆今回は、「バーロ、奇跡っていうのはなく」のセリフがポンツと頭に浮かんだことから始まりました。うちには珍しいパターンです。ただ問題は、どんな『奇跡』にするかってことでして(苦笑)

『新一が元に戻り、蘭ちゃんに会いに行く。↑キッドがAPT-Xのデータを盗み、哀ちゃんが薬を作り……』っていう連載ものも考えてたんですが、ムリでした。

この場合、浮かんだ例のセリフはキッドが哀ちゃんに向かってものと怪盗な口調で言うんですけど。

『奇跡というものは、起きるのではなく、起こすですよ、お嬢さんv』って感じで(笑)

☆そんな経緯があり、思いっきり変更し『プロポーズ話』に……。新一が一体何と言ってプロポーズしたのかは、ご想像お任せしようと思います。

いくつ……なんでしょうね？ 2人とも。年齢設定をしていません。ただ、元に戻ったのは2年前の夏という設定だけは決めさせていただきました。

☆さて、非常に残念なのですが、正月・バレンタイン・ホワイトデー（これはバレンタインがないですし）はスルーになります。おそろく……というか絶対に書いてる時間がないと思うので。むしろ、今こうしてクリスマスも書いてるのが不思議なくらいです。来年の春に、再び無事に会えることを祈って……。

☆毎度のことですが、長くなりましてスイマセン。では……
M e r r y C h r i s t m a s a n d H a v e a N i c
e Y e a r ! !

これからも来年もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3006d/>

奇跡

2010年10月17日06時21分発行